

宗教改革研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学社会科学研究所 公開日: 2013-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 倉塚, 平 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/15216

宗 教 改 革 研 究

倉 塚 平

On the Study of the Reformation
in sixteenth Century

Taira Kuratsuka

前年度に引きつづき本年度も宗教改革ことに再洗礼派運動について研究した。この成果の一部は、雑誌「思想」1973年7月号に「再洗礼派の権力観」と題する Stayer, “Anabaptists and Sword” (1972) の書評の形で現われている。

再洗礼派は正統派改革運動をラディカライズせんとして排除された雑多な分子から成る運動で、その多様性を反映して権力に対する態度も、無抵抗主義から暴力的な革命主義へと多様に展開していた。従来この多様性をシェーマ的に明快に捉えようとする試みは、ほとんど失敗してきた。だが Stayer は、各再洗礼派の権力に対する態度を詳細に追求し、ルターのモデレートな非政治主義とミュンツァーのラディカルな政治主義の間にそれぞれが位置し、その主たるベクトル方向は、スイス兄弟団やフッター派などのラディカルな非政治主義（現世逃避的無抵抗主義）にあることを鮮やかに示すに至った。彼は次のように結論する。

「再洗礼派は既成教会から離脱した分離主義者であった。この分離主義こそが1525年のチューリヒにおける最初の再洗礼派の本来の意味であった。この分離主義は教会から離脱したものはこの世、世俗権力、剣からも離脱しなければならないという点で一貫していた。迫害の共通体験がまた剣に対する彼らの見解の終局的に一致に寄与した。この迫害は彼らにこの世の問題とじかに対決させたし、権力の乱用を骨身にしみて体験させたのである。彼らは権力を振り子どもを恨み拒否しなければならなかった。キリストは間もなく再臨するという彼らの期待も裏切られた。デンク、マーベック、ホフマン、メンノーなど、支配者も潜在的にはキリスト者たりうるとして、それに同情的理解をもとうとする者たちの努力も、迫害された信徒に必然的に生じてくる倫理的二元論の世界観とは合致しなかった。支配者に抵抗することは不可能であるが、同時に彼らを拒否しないことも不可能だったので、再洗礼派が剣について必要とする教義は、支配者に抗うことなく彼らを拒否するていのものであった。フッター派やメンノー派がザトラー型の剣についての態度をとるに

至ったのは、彼らがスイス兄弟団にそれを構成するよう促進したと同じ宗教的心理的必要を感じていたからである。

かく見る限り、再洗礼派の権力観の本質は非政治主義でかつラディカリズムであるといえることができる。その点も典型的な位置にあるものは、ザトラーやリーデマンのそれだということになる。だがロートマンのようなラディカルな十字軍もメンノーのような温健な非政治主義も運動の初期の歴史の中では、その地歩を占めていた。初期再洗礼派を根本的に暴力的なものに見做す東独史家やルター史家の誤りは、運動の基本的な非政治性を看過したことにあり、他方あらゆる真の再洗礼派はすべて無抵抗主義であるとするメンノー派史家の誤りは、ある場合には暴力とも両立しうるような運動固有の非正統性とラディカリズムを看過しているのである。